

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月12日現在

機関番号：32631

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530772

研究課題名（和文） 偽りの記憶における社会的要因の検討

研究課題名（英文） A study of social factors in false memories

## 研究代表者

高橋 雅延（TAKAHASHI MASANOBU）

聖心女子大学・文学部・教授

研究者番号：10206849

研究成果の概要（和文）：まったく経験してない出来事の記憶が想起されるという偽りの記憶の出現に関して、想起の際の他者の判断の影響を実験的に調べた。その結果、他者の人数（1～2名）や専門性（記憶能力）によって、偽りの記憶の出現が大きく影響されることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The present study examined the social influence on false memories for events that never actually happened. The confederate's response and characteristics showed conformity effects on false recognition memory.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：記憶心理学

科研費の分科・細目：心理学・実験心理学

キーワード：偽りの記憶、同調

## 1. 研究開始当初の背景

偽りの記憶とは、客観的にはまったく起こっていなかった出来事であるにもかかわらず、その出来事を強い確信とともに想起してしまうという記憶のエラーである。

このような偽りの記憶に関心が集まるようになったのは、1990年代の中頃以降である。当時、アメリカ合衆国において、幼児期の性的虐待といった激しいストレスをとともう出来事の記憶が何年も抑圧され、そのような記憶を心理療法や催眠によって回復し、この記憶を証拠として両親や近親者を訴えるというケースが数多く起こり、大きな社会問題となっていた。これに対して、記憶心理学者を中心に、そのような記憶の多くは、本物の記憶区ではなく、（本人の意図しない）偽りの記憶であるという主張が行われ、記憶の回

復を信じる心理療法家との間に激しい論争が起こっていた（高橋，1999，聖心女子大学論叢92集）。

このような社会的状況のもと、どのようなメカニズムによって偽りの記憶が生み出されるのかという理論的関心が記憶心理学者の間に高まっていった。そして、偽りの記憶を実験的に検討するためのパラダイムが2種類開発されてきた。すなわち、一つは、幼い頃の偽りの出来事（迷子や動物に襲われたなど）を提示して、それを思い出すかどうかという偽りの自伝的記憶パラダイムである（高橋，2009，聖心女子大学論叢113集）。

もう一つは、本研究課題で扱う人工的な材料を使ったパラダイムであり、開発した研究者の頭文字から DRM パラダイムと呼ばれるものである。すなわち、この DRM パラダイムで

は、実験では提示しない未提示語（「眠り」など）と意味的に強く関連したリスト語（「枕」「ベッド」「休息」「目覚め」「疲労」「夢」など）を学習させ再生や再認を求めると、提示していない未提示語が誤って想起されることが非常に多い（この未提示語の想起エラーが偽りの記憶である）。偽りの自伝的記憶パラダイムに対して、この DRM パラダイムは、従来の記憶心理学で明らかにされてきた要因（材料や提示方法、保持時間、テスト形式、参加者要因など）を組み込んで検討するのが容易であるという理由から、このパラダイムを使った偽りの記憶の研究が数多く行われている（Gallo, 2006『虚記憶』北大路書房、高橋 2002a, 2002b, 2003, 聖心女子大学論叢第 98 集～第 100 集）。

## 2. 研究の目的

従来の DRM パラダイムによる研究は、先に述べたように、どちらかと言えば、偽りの記憶の形成に関連する個人内の認知的要因（材料や提示方法、保持時間、テスト形式、参加者要因など）の検討が中心であった。

しかし、偽りの記憶の研究の生まれてきた社会的背景を考えるのならば、心理療法や催眠（ないしは催眠療法）など、他者の存在している場面という社会的要因こそが重要であって、それが抜け落ちてしまっている点は致命的な問題であると思われる。

もちろん、従来の研究でも、実験者という他者は存在しているが、あくまでも無色透明な存在としてその場に立ちあっているだけである。これに対して、一般に、偽りの記憶が形成されることの多い心理療法（複数のクライアントが集まるグループセラピーも含む）や催眠（ないしは催眠療法）などでは、そこにいる他者（セラピストを含む）は当事者の記憶をあたたかく受け入れてくれる存在である。この点で、他者という社会的要因の検討は必要不可欠なものであると言えよう。

そこで、本研究では、偽りの記憶の形成における社会的要因（その場で交流の行われない他者の存在という要因）に焦点を絞り、同じ経験（同じ学習材料の記憶実験）をもった他者（実験協力者）の判断が偽りの記憶の形成ないしは修正にどのような影響を与えるかの解明を目的とした。

具体的には、社会心理学の判断の同調の研究において明らかにされてきた要因（他者の人数、専門性など）を体系的に取り上げて 3 つの実験による検討を行った。

## 3. 研究の方法

他者の人数（1～2名）と専門性（記憶能力の高さ）を実験的に操作する以外の基本的な研究の方法は、以下のすべての実験におい

て同じであった。すなわち、別の参加者として紹介される実験協力者 1 名（実験 1 と 3）か 2 名（実験 2）と、本物の参加者に DRM パラダイムによる単語（宮地・山, 2002, 基礎心理学研究 21 巻）の学習と再認テストを求めた。

実験参加者および実験協力者はすべて女子大学生であり、いずれの実験でもランダムに 2 群（同数の統制群、実験群）に分けた（検定力を考慮し、いずれの統制群、実験群も 24 名とした）。

具体的には、実験は学習段階と再認テスト段階の 2 段階からなり、実験協力者 1 名（か 2 名）と参加者 1 名がペアとなった（参加者はもう 1 名が実験協力者であることを知らなかった）。実験 3 だけ、実験の最初に実験協力者に記憶力の自信について尋ね、実験協力者は「昔から記憶力にはとても自信があります。小学校から高校まで、暗記科目は得意でした」と答えることで、実験協力者の専門性が高いと思わせた。

最初の学習段階では、（実験 1、2 は聴覚により、実験 3 は視覚により）提示される 15 語からなるリスト（合計 5 リストで各リストの未提示語は「悪魔」「階段」「聞く」「電波」「平和」）が終わるごとに直後書記再生を 2 分間ずつ行った。

こうして 5 リスト目の直後書記自由再生が終わった時点で、第 2 段階の 3 種類の再認テストを次の順番で行った（すべてテスト時間は参加者ペースであった）。これらの再認テストは未提示語（5 語）に関するものだけであった。

最初の直後個人再認では、実験者によって提示される単語を見て、実験協力者も参加者も黙って手もとの反应用紙に「あった」か「なかった」かの再認判断を記入した。2 分間の干渉課題（一桁の連続加算作業であるクレペリン検査）に続く次のペア再認では、先ほどと同様に実験者が提示する単語を見て、最初に実験協力者が口頭で常に「なかった」と答え、次に参加者が口頭で答えるというように、交互に再認テストを受けた（なお、統制群に該当する他者の存在だけの群では、この 2 回目の再認テストは互いの答がわからないように実験者の耳元でささやくという方法によって行われた）。そして、再び 2 分間の干渉課題（クレペリン検査）に続く最後の遅延個人再認では、もう一度、直後個人再認と同様のテストを受けた。いずれの再認テストも 5 段階の確信度評定をあわせて行った。

なお、実験の最後に、DRM パラダイムを知っていたり、類似の実験を受けた者のデータは破棄し、新たにデータを取り直した。また、すべての実験の実験参加者の取り扱いに関しては、聖心女子大学心理学研究室の「調査協力者・実験協力者を扱う際の指針」に従っ

た。

結果の分析では、実際に提示されていない未提示語（5語）のうち、正しく「なかった」と答えられた項目を正反応とし、誤って「あった」とされた項目をエラー（虚再認）とし、エラー率（虚再認率）を算出した。

これらのエラー率と確信度を従属変数として、3回のテストごとに求め、2（統制群、実験群）×3（直後個人再認、ペア再認、遅延個人再認）の分散分析によって統計的検定を行った（柳井, 2003 『4 Steps エクセル統計 第2版』オーエムエス）。

#### 4. 研究の成果

3つの実験すべてにおいて、いずれの群でも、直後再認のエラー率の平均は、64~83%というように、非常に高い確率で偽りの記憶が出現した。したがって、DRM パラダイムは偽りの記憶を検討するのに妥当な課題であることが確認されたと言えよう。

次に、他者の答えに続いて再認判断を行うペア再認のエラー率を統制群と実験群で比較した。その結果、実験1の他者の人数が1人の場合、統制群のエラー率（75%）よりも実験群のエラー率（53%）の方が有意に低いことが明らかとなった。同様に、実験2の他者の人数が2人の場合、統制群のエラー率（68%）よりも実験群のエラー率（62%）の方が低い傾向であったが、有意差は認められなかった。実験3の他者の専門性の高さをアピールした場合は、統制群のエラー率（79%）よりも実験群のエラー率（47%）の方が有意に低いことが明らかとなった。

3回目の再認テストは2回目のペア再認テストにより真に記憶に変化が起きているかどうかを調べることができるので、上と同様に実験ごとに検討を行った。その結果、予測に反して、実験2（実験参加者が2名）では統制群のエラー率（62%）と実験群のエラー率（64%）との間に有意差は認められなかった。これに対して、実験1（実験協力者が1名）と実験3（実験協力者の専門性が高い）では、いずれも統制群のエラー率（実験1：72%、実験3：78%）よりも実験群のエラー率（実験1：56%、実験3：57%）の方が有意に低いことが明らかとなった。

なお、いずれの実験のどのテストにおいても、確信度の結果は、エラー率の結果とほぼ同様の結果であった。

これらの結果をまとめると、おおむね、他者の判断に同調する傾向（間違っただけで答えやすい状況であるにもかかわらず、提示されていなかった単語を正しく「なかった」と答える傾向）がペア再認テストで認められ、この記憶の同調効果は遅延個人再認でも持続することが明らかとなった。ただし、実験協力者が2名の場合の結果については、より強力な

同調効果が得られると予測したが、明確な結果は得られなかった（一つの可能性としては、実験2の実験参加者の偏りがあると考えられるかもしれない）。

また、他者の専門性を操作した（記憶能力がきわめて優れていると思い込ませた）上で、正しい判断（提示されていなかった単語を「なかった」と答える）にさらされた場合にも、やはり同様の同調効果が認められた。

したがって、これらの結果は、偽りの記憶と呼ばれる記憶エラーが他者の正しい判断にさらされると、修正されることのあることを示していると言えよう。

以上の実験結果から、（1）他者による記憶の社会的影響（つまり同調）は、比較的簡単に起こること、（2）社会的影響には偽りの記憶の修正というプラス面もあるということが明らかとなった。これらの結果は、心理療法や催眠（ないしは催眠療法）において、その場に居合わせた他者の判断によって同調効果が起こり得ることを示唆すると同時に、これらの社会的な場において偽りの記憶の出現してしまう危険性を示していると言えよう。

本研究では、他者（実験協力者）との間にいっさいの交流がなかったにもかかわらず、同調効果が認められた。今後は、他者との間でのどのような交流が同調効果にどのような影響を与えるのかをさらに検討していく必要があると思われる。また、単語といった人工的な材料では一般化の限界もあるので、より生態学的妥当性の高い材料（たとえば、何らかの体験など）を使った検討も必要であろう。さらにまた、女子学生だけではなく、男子学生や年齢の異なる実験参加者（たとえば、幼児や高齢者など）を対象にして同様の検討を行っていくことも考えられるべきと思われる。

最後に、本研究が明らかにした記憶の同調効果は、心理療法などの場面に限定されるわけではないことを強調すべきであろう。一般に、事件や事故の目撃者の記憶は不正確であるということが繰り返し明らかにされてきている。しかし、これらの目撃記憶の研究は実験参加者個人を対象にしたものがほとんどであり、他者の存在という社会的要因の検討があまり行われていない。本研究の知見をもとに考えるのならば、目撃者から記憶を聴取する際に、他者の判断にさらされることの記憶同調の危険性を考え、可能な限り正確な記憶の聴取法を採用することが求められると結論づけられよう。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕 (計 1 件)

Takahashi, M. The effects of conformity on false recognition in the Deese-Roediger-McDermott paradigm. 聖心女子大学論叢、査読無、118, 2012、3-14.  
[https://u-sacred-heart.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=18&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=17](https://u-sacred-heart.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=18&item_no=1&page_id=13&block_id=17)

〔学会発表〕 (計 1 件)

Takahashi, M. The effects of conformity on false recognition in the DRM paradigm. 12th European Congress of Psychology, 2011 July 7, Istanbul.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 雅延 (TAKAHASHI MASANOBU)  
聖心女子大学・文学部・教授  
研究者番号：10206849

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし